

# CELの40年を振り返るための10冊

CELの40年の歩みのなかで、歴代の所長や研究員は多くの著作を手がけてきています。そうしたさまざまな本のなかから、今号の特集の理解にもつながる10冊を紹介します。



## 6 『時代の散歩道』 ——倉光弘己対談集』

創刊当時の『CEL』誌に連載された対談の書籍化。初代所長倉光氏が幅広い分野の泰斗・俊秀13人を迎えて語り合う。自然と文化、衣食住、歴史・文学・芸術まで、単なる「拝聴」にとどまらず、時に丁々発止の議論を交わす内容は重厚で、また軽妙。全方位の興味と高い見識は、そのままCEL草創期の溢れるエネルギーを体現している。

倉光弘己=著  
KBI出版／1990年



## 7 『コミュニティ・デザイン新論』

「現代社会の困難=希望をめぐる難問に挑む！」がコンセプト。人口減少、貧困・格差、災害復興、ポスト標準家族、多文化化など、地域が直面する構造的な問題に、多分野の実践者・研究者が向き合い共に考える。弘本研究員が参画し、十数年にわたったCELと同志社大学大学院総合政策科学研究科による連携講座での出会いと議論が結実。本書は2025年に第23回日本NPO学会賞を受賞した。

新川達郎=監修 川中大輔・山口洋典・弘本由香里=編  
さいはて社／2024年



## 8 『どれだけ消費すれば満足なのか』 ——消費社会と地球の未来』

人類の欲望と消費が地球環境に与える負の影響を読み、幸せを決めるのは物量の差ではないと世に警告する一書。訳した第2代所長山藤氏は跋文に「一人ひとりが自らの責任を実感し(中略)ライフスタイルを変えること」が要請されていると記しており、世界規模の課題と生活者の視点の架橋を目指すCEL独自のスタンスの表明も見て取れる。

アラン・ダーニング=著 山藤泰=訳  
ダイヤモンド社／1996年



## 9 『わが家をエコ住宅に』 ——環境に配慮した住宅改修と暮らし』

住宅団地の計画・設計に携わってきた演研究員(当時)が、築27年RC造の中古住宅を購入し、環境共生住宅(エコ住宅)として甦らせた実践の記録。断熱性の改善、自然エネルギーの活用などの手法は非常に興味深い。しかし本書の核心は、その過程で省エネを「自分ごと」として引き受け、「足るを知る」暮らしへと意識が変わっていく点にある。

演恵介=著  
学芸出版社／2002年



## 10 『住まいと暮らしの提案50 総集編』

1988年開始のラジオ大阪『住まいの110番』の記録。既刊書未収録の内容を中心に、CELとして「主張・研究成果を集成する意図で体系化」(編集後記)した一冊と言える。5人の研究員が語る住まいの「総論」「各論」、心豊かで個性的な「暮らし論」は、生活者の視点に立ったCELならではの今なお変わらぬ主張に他ならない。

CEL“住”研究会(古館晋・隅野哲郎・石橋裕司・栗本智代・弘本由香里)=著  
KBI出版／1996年



## 1 『炎と食』 ——日本人の食生活と火』

「炎と食」を切り口に、都市ガスの歩みを概観し、日本人の食の歴史を整理する構成。神話の考察から、人類はいつ火を利用し始めたかまで遡り、現代の食文化が形成される過程を、有識者や山下研究員(当時)らの論考により多角的に示す。ガスのコンロや炊飯器など、ガス調理機器の変遷をカラーで紹介しており資料的価値も高い。

大阪ガス エネルギー・文化研究所 炎と食研究会=編  
KBI出版／2000年



## 2 『ジオカタストロフィ』 ——上 人類滅亡のシナリオ 下 破局回避のシナリオ』

情報誌『CEL』18号の特集「ジオカタストロフィ報告書」に新たなコンテンツとデータ、写真などを加えて再構成された書籍。上巻では当時最先端の状況判断に基づいた人類滅亡のシナリオ、下巻では破局回避の困難さと進むべき道を、多彩な識者が提示している。「統合した視野の中で中長期的な研究」を目指すCELの真骨頂というべき大冊だ。

坂田俊文=監修 ジオカタストロフィ研究会=編  
NHK出版／1992年



## 3 『上方生活文化堂』 ——大阪の今と昔と、これから』

第9代所長池永氏が、大阪くらしの今昔館館長(当時)の谷直樹氏と実施した文化講座「上方生活文化堂」(産経新聞社主催、CEL・大阪くらしの今昔館企画)をもとに書籍化。大阪の文化・歴史を紐解いてその魅力を再発見し未来へつなげるという、池永氏が掲げた「ルネッセ」実践例の一つでもある。

池永寛明・谷直樹・深田智恵子・服部麻衣・椿山一希=共著  
大阪ガス(株) エネルギー・文化研究所、  
大阪市立住まいのミュージアム(大阪くらしの今昔館)／2019年



## 4 『カリスマ案内人と行く大阪まち歩き』

大阪のまちに精通した、“カリスマ案内人”がガイドするまち歩きを紙上で体験できる一冊。橋爪節也氏が筆頭に、案内人たちの大阪への深い愛情と個性があふれる語り口が再現されており、見知らぬはずの“通り”や“筋”、施設、建築物などの意外な表情を再発見できる。同時に、まちの文化的・歴史的財産を未来へ継承していくことの重要性和意義を感じさせられる。

栗本智代=著  
創元社／2013年



## 5 『悠々と生きる』

第3代所長古館氏が『大阪新聞』に約1年にわたって連載した随筆コラムをまとめた一冊。環境をめぐるミミズと人類の対比、老いて高まる能力、シルクロードのラクダ考、賢さと金持ちの不幸、そして人間と時間と宇宙……明快な文で語られるさまざまなエピソードは、古館氏自ら「所内での長年の種々な議論」の賜物と述べる。当初から「創造の場」を掲げたCELの雰囲気を感じ取れるようだ。

古館晋=著  
KBI出版／2003年

